

「読むこと」における論の進め方について考える力を育成する国語科学習指導の工夫 — 精査・解釈において部分と全体を往還する読みを通して —

府中町立府中小学校 大脊戸 将

研究の要約

本研究は、「読むこと」における論の進め方について考える力を育成する国語科学習指導の工夫を考察したものである。「読むこと」における論の進め方について考える力について、筆者が自分の考えをより適切に伝えるために、どのように論を進めているのかを考えることと、どのような理由や事例を用いて説得力を高めようとしているのかを考えることと定義した。この力を育成するために、精査・解釈において、文章全体の構成や要旨を捉える「全体の読み」と文章を詳細に捉える「部分の読み」の二つの読みを往還させる学習指導を行った。指導に際しては、筆者の論の進め方について考える「虎の巻」を作成・活用し、捉えた筆者の工夫を全体の読みと部分の読みに分類し、自らの読みをメタ認知させるようにした。研究授業及び検証の結果、部分と全体を往還する読みを行うことは、筆者の論の進め方について考える力を育成することにおいて有効であることが分かった。

I 主題設定の理由

令和3年度全国学力・学習状況調査の説明的な文章において、目的に応じ、文章と図表とを結び付けて必要な情報を見付ける問題における所属校の通過率は37%（全国平均34%）であった。この理由として、筆者が自分の考えをより適切に伝えるためにどのような事例を用いているのかについて考えることや、文章中に用いられている図が、文章のどの部分と結び付くのかを明らかにすることにつまずいていることが考えられる。そのため、筆者が自分の考えをより適切に伝えるために文章をどのように構成しているのかを考えること、どのような理由や事例を用いることで説得力を高めようとしているのかを考えることを育成していく必要があると考える。

そこで本研究では上に示した二つを「論の進め方について考える力」とし、説明的な文章の「精査・解釈」において筆者の論の進め方について考える力を育成したいと考える。

以上の構想を基に、研究主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 論の進め方について考える力について

論の進め方について考える力について小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（以下、「解説」とする。）第5学年及び第6学年C読むこと（1）ウでは、「「事実と感想、意見などとの関係」や「文章全体の構成」などを基に、目的に応じて、書き手は自分の考えをより適切に伝えるために、どのように論を進めているのか、どのような理由や事例を用いる

ことで説得力を高めようとしているのかなどについて考えをもつことである。」¹⁾と示されている。

この「解説」の記述を踏まえ、論の進め方について考える力とは、「筆者が自分の考えをより適切に伝えるために、どのように論を進めているのかを考えることと、どのような理由や事例を用いて説得力を高めようとしているのかを考えること。」と定義する。

2 先行研究において示された説明的な文章の授業における課題と取組の具体

森田信義(2011)はこれまでの説明的な文章の授業について「「叙述に即して正確に読む」というスローガンのもとに展開された実践である。」²⁾と述べている。さらに「学習者＝読み手の内面は、空虚であっても構わない存在ではなかっただろうか。空虚の中に、価値ある内容と形式を流し込むことが学習であり、指導であると考えられてこなかっただろうか。（中略）しかし、国語教室における読むことは、このような「分かる」を目指すものであってはならない。」³⁾と述べている。

これまでの説明的な文章の授業では、内容を正確に読み取ることに重きが置かれ、論理的思考、認識の仕方に照らして筆者の述べ方や主張に納得がいくかどうかという読みについては、授業の中で重要視されてこなかったという状況があったと言える。

(1) 「確認読み」と「評価読み」

森田(2011)は、「書き手が書いてある通りに（叙述に即して）理解する読みを「確認（のための）読み」と呼んでおく。」⁴⁾とし、「「評価読み」とは、「確認読み」として読み取ったもの（ことがら・内容、表

現方法、論理)を、それらの妥当性や問題の有無という観点から吟味・評価すること」⁵⁾として、「確認読み」と「評価読み」の二つの読みに分類している。従来の文章の内容を正確に把握する読みは「確認読み」、論の進め方について考える読みは「評価読み」に相当すると言える。

(2) 「評価読み」の必要性について

森田(2011)は、「評価読み」の必要性について「「正確に理解する能力」(つまり、読解のための基礎的、基本的能力)を最重要視する読みの指導によっては欠落してしまう読みというものがあるという事実を押さえておかななくては、読むという魅力的な活動の重要な面を忘れてしまうことになる。」⁶⁾と述べている。

これまでの国語科授業では読解技能に関する「確認読み」を主として行ってきたが、そこにどのような価値や問題を含んでいるのかを考えていく「評価読み」も行うことが、これからの授業には必要であると言える。

(3) 「確認読み」と「評価読み」の関係について

森田(2011)は、説明的な文章の読みの能力構造⁷⁾(図1)を示し、「「評価読み」は、(中略)「確認読み」と無関係ではない。むしろ質の高い「評価読み」をするためには、これも質の高い「確認読み」は必須である。両者が絡み合って、実際の読みが始められ、進められ、完了するのである。(中略)「確認読み」を切り離れた形での「評価読み」を目指すことはほとんどない。」⁸⁾と述べている。すなわち、森田によれば「確認読み」と「評価読み」は切り離すことなく読み進めていくことが目指されていると言える。

このことから、読み手の論理を大切にする読みとして「確認読み」と「評価読み」の両者が絡み合った読みが必要であると考えられる。

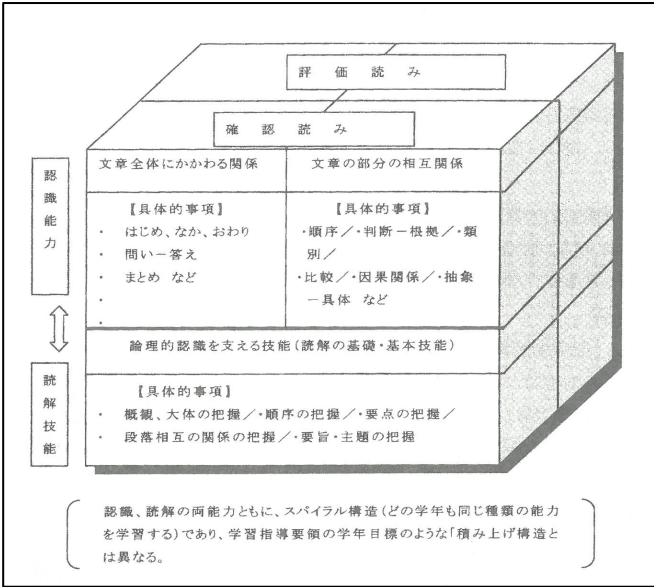


図1 森田による説明的な文章の読みの能力構造

3 論の進め方について考える力を育成するために

(1) 論の進め方について考えるための指導の手順

河野庸介(2010)の考えを基に、論の進め方について考えるための指導の手順を次の表1に整理し、①②では主に「確認読み」を、③～⑤では主に「評価読み」を行うこととする。

表1 説明的な文章において指導する事柄(河野の考えを基に論者が作成)⁽¹⁾

手順	指導する事柄
①	問題提起と結論とを理解させる。
②	結論と本論の各部分との関係について検討させる。
③	本論に示された各部分が結論を支える根拠になっているかどうか考えさせる。
④	筆者の考えについて考えさせる。
⑤	文章の表現内容や表現方法について考えさせたり判断させたりする。

(2) 「部分と全体を往還する読み」について

河野(2010)は、「当該文章を自らの目の前に対象化して置くとともに、書き手である作者と対峙する気持ちで読み進めることが求められる。」⁹⁾と述べている。つまり、文章を対象化し筆者と対峙することにより、文章の内容を深めることにつながり、筆者の論の進め方について考えることができると考える。さらに河野(2010)は、「文章の概略(全体)を踏まえつつ、その細部(部分)について、段落相互の関係や心情の変化などにかかわって「文章を対象化」しつつ読み解いていくのである。」¹⁰⁾と示している。

本研究では、森田(2011)と河野(2010)の考え方を取り入れ、「確認読み」と「評価読み」が相互に絡み合う読みの手法としての「部分と全体を往還する読み」を図2のように構想し、これを通して筆者の論の進め方について考える単元づくりに取り組む。

(3) 「確認読み」における「部分と全体を往還する読み」について

「評価読み」の前にまず「確認読み」において、全体の読みとして「要旨の把握」「初めー中ー終わり」「定義化」について捉える。特に、部分と全体を往還する読みを行うために要旨を確実に把握させる。部分の読みとしては、「段落相互の関係、接続語」「事例、比較」「写真、図」「当事者意識」「呼びかけ」について捉える。その際、部分の読みを行うに当たって全体の読みに立ち戻ることがある。そのため、部分から全体、全体から部分に読み進めることが考えられる。

(4) 「評価読み」における「部分と全体を往還する読み」について

次に「評価読み」において、全体の読みとして「な

「初め-中-終わり」に分けているのか。」「なぜ双括型にしているのか。」「なぜこの事例の順序なのか。」などについて考える。部分の読みとしては「なぜこの事例を用いているのか。」「なぜこの資料を用いているのか。」「なぜ呼びかけを使っているのか。」「なぜ最後に当事者意識をもたせているのか。」などについて考える。部分の読みを行うに当たって全体の読みを基にすることがあることから、部分から全体、全体から部分に読み進めることが考えられる。さらにこれらの読みを行い筆者の論の進め方について考えるためには、常に要旨を念頭に置くことが必要であると考え。また、この過程においては、「確認読み」の段階に戻って構造や内容を捉え直すことも考えられる。

このことから「部分と全体を往還する読み」とは、「確認読み」で捉えた要旨を念頭に置き、「評価読み」において「なぜ？」を考える際に、全体の読みと部分の読みを行きつ戻りつすることで筆者がどのようにして要旨に説得力をもたせているのかを考えることとする。

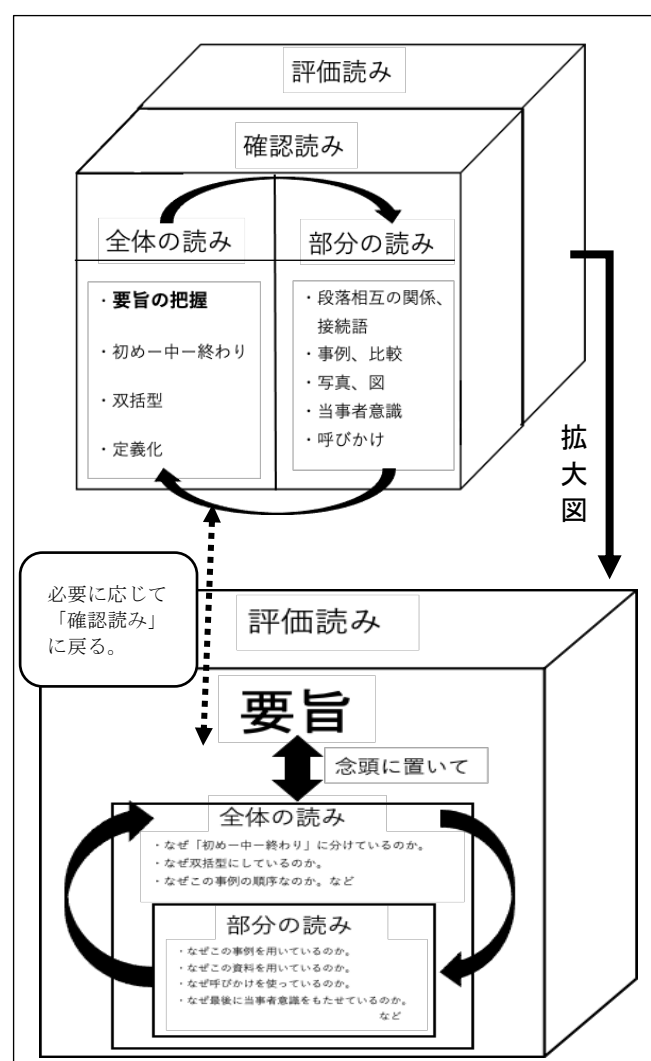


図2 部分と全体を往還する読みを表した図

4 部分と全体を往還する読みの方略としての「虎の巻」について

(1) 「虎の巻」とは

児童が自ら部分と全体を往還させながら読むためには、段落相互の関係や事実と意見の区別などの既習事項を活用する必要がある。

古賀洋一(2012)は、「自立した読み手育成の上でメタ認知は読みを制御する重要な働きを担っており、そのなかで活用されるメタ認知的知識の一部が読みの方略である。」¹¹⁾と示している。児童が自立した読み手となるためには、児童自らが文章を読み進める上で観点を明らかにして読み進めることが重要である。そのため、児童が自らの読みをメタ認知することができるように、メタ認知的知識を方略として活用することができる手立てが重要であると考え。

これに基づいて本研究では、筆者の主張を読み取る際、論理展開を捉えるための「虎の巻」を作成し活用することで、書き手はどのような理由や事例を用いることで説得力を高めようとしているのかについて考えることと、書き手は自分の考えをより適切に伝えるために、どのように論を進めているのかについて考える単元づくりを行う。

「虎の巻」は一枚ものであり、中央に教材文、教材文の上に全体の読みにおける着眼点、教材文の下に部分の読みにおける着眼点をそれぞれ書くこととする。教材文に線を引き、着眼点と結び付けたり、色を付けたりすることを通して、筆者の論の進め方について考えることにつなげていく。そうすることで児童は、部分の読みと全体の読みの着眼点を基に、筆者の論の進め方について考えることができる。

(2) 「虎の巻」の作成と活用法について

児童の既習教材である「未来につなぐ工芸品(国語四下 かがやき 光村図書4年)」を活用し、論の進め方について考えるための「虎の巻」を作成する。教材を一枚ものにするすることで、文章全体を見通し、部分の読みと全体の読みをメタ認知することができるため、どのような理由や事例を用いて説得力を高めようとしているのか、筆者の考えをより適切に伝えるためにどのように論を進めているのかについて考える力の育成につながるのではないかと考えたためである。

そして既習教材を活用して作成した「虎の巻」で得た方略を「固有種が教えてくれること(国語五 銀河光村図書5年)」で活用することを通して、文章全体の読みと文章を詳細に捉える部分の読みの二つを往還させ、筆者の論の進め方について考える力を育成する。さらに、「虎の巻」は新たな説明的な文章の読みにおいても活用することができる。

児童は、既習教材で文章全体の構造、叙述と資料との関係、段落相互の関係やそれらに込められた筆者

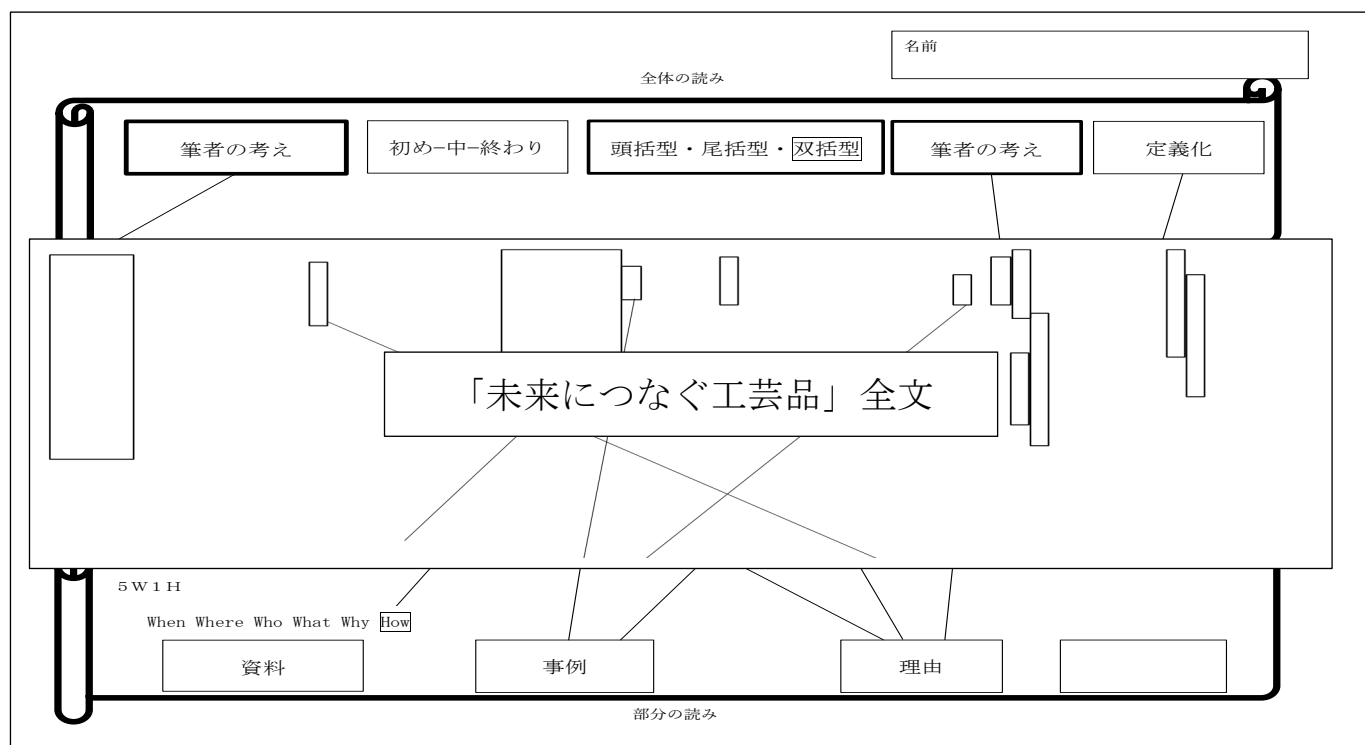


図3 「虎の巻」の具体

の考えといった条件的知識を得た上でそれらを「虎の巻」により自らの読みをメタ認知することができると考える。「虎の巻」の具体を図3に示す。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

部分と全体を往還する読みを通して、筆者は自分の考えをより適切に伝えるために、どのように論を進めているのか、どのような理由や事例を用いることで説得力を高めようとしているのかなどについて考えをもつことができるようになり、「読むこと」における論の進め方について考える力を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表2に示す。

表2 検証の視点と方法

	検証の視点	検証の方法
1	論の進め方について考える力を育成することができたか。	・プレテスト ・ポストテスト ・学習成果物 ・振り返りシート
2	部分と全体を往還する読みは、論の進め方について考える力の育成に有効であったか。	

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の内容

研究授業の内容について表3に示す。

表3 研究授業の内容

期間	令和7年6月30日～令和7年7月16日	
対象	所属校第5学年	
単元名	資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう 「固有種が教えてくれること」	
重点指導事項	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。（思考力、判断力、表現力等C（1）ウ）	
言語活動	「固有種が教えてくれること」を筆者の説明の工夫を探しながら読み、筆者の論の進め方について「虎の巻」を用いて考え、分かったことについて説明する。	
次	時	学習活動
一	1	・本教材で付けたい力、単元を貫く課題を確認する。 ・範読を聞いて「要旨は何か」「資料とつながる段落はどこか」を読み取る。

	2	文章と図表を結び付けるなどして、文章全体の構成を捉える。
	3	
	4	文章全体の構成を捉えて要旨を把握する。
	5	
二	6	筆者の説得力を高めるための工夫を考え論の進め方について考えをもつために4年「未来につながる工芸品」を活用し、「虎の巻」を作成する。
	7	
三	8	4年の「虎の巻」で身に付けた力を活用し、5年「固有種が教えてくれること」の「虎の巻」を作成し、筆者の論の進め方について考える。
	9	
	10	学んだことを基に振り返り、次の説明的文章の学習に生かせることは何か考える。

2 授業の実際と指導の工夫

(1) 部分の読みと全体の読みをメタ認知させる指導の工夫

「虎の巻」では、筆者が自分の考えをより適切に伝えるために用いている工夫を、文章全体に関すること、部分に関することに分類して書くことができるようにした。この工夫により児童が捉えた筆者の工夫を全体の読みと部分の読みで分類し、自らの読みを対象化してメタ認知することができるようにした。

(2) 部分と全体を往還する読みを促す指導の工夫

言葉を手掛かりに、部分と全体の共通点や相違点を見いだした上で、要旨を念頭に置き事例の順序を判断させる指導の工夫を行った。具体的には、言葉を比較させるための声掛けを行う、言葉を区切ることで比較する言葉を絞らせる、要旨を常に念頭に置かせるために毎時間要旨の確認を行わせる、要旨を常に意識できるようにワークシートの色や配置を工夫するという、四つの工夫を行った。

(3) 主体的な学びを促す指導の工夫

児童の既習教材である「未来につながる工芸品（国語四下 かがやき 光村図書4年）」を用いて、筆者の論の進め方について考える授業を行い、そこで得た方略を5年「固有種が教えてくれること」において活用することのできる単元計画とし、児童が自ら方略（「虎の巻」）を活用して、主体的に筆者の論の進め方について考えることができるようにした。

V 研究授業の分析と考察

1 論の進め方について考える力を育成することができたか

(1) プレテスト及びポストテストの概要

筆者の論の進め方について考える力が身に付いた

かを検証するために、プレテストとポストテストを行った。プレテストとポストテストは全2問、同一の問題で行った。1問目は、文章全体の構成を手掛かりに要旨を捉える問題である。2問目は、筆者の論の進め方について分かったことを説明する問題とした。

問題1では、文章構成を捉え、筆者が文章の中で伝えたかったこと（要旨）を読み取っているかどうかについて見取った。具体的には、「初めー中ー終わり」や「頭括型、尾括型、双括型」などの文章構成が分かり、要旨が書かれている段落を読み取ることである。

問題2では、筆者の考えを読者に分かりやすく伝えるために筆者はどのような工夫を文章の中でしているのか、またその理由について考えることができるかを見取った。具体的には、問題1で見取った文章の種類や構成の意味や、資料や事例が用いられている意味について考えたことを説明することである。

(2) プレテスト及びポストテストの分析と考察

問題1におけるプレテストとポストテストの児童の解答を分析するための基準を表4に示す。

表4 問題1における判断基準

解答類型		正答
(正答の条件) 次の条件を満たして解答している。 ① 要旨が書かれている段落が分かっている。 ② 要旨をキーワードを使って書いている。ただし、キーワードに類する言葉を用いて解答している場合も正答とする。 (キーワード例) 「一人の気付きから誕生した面ファスナー」「人々の要求に応える形」「活躍の場」「さらなる便利さ」		
(正答例) ・一人の気付きから誕生した面ファスナーは、人々の要求に応える形で活躍の場を広げ、さらなる便利さが追求されている。(解答類型1) ・「一人の気付きから誕生した面ファスナー」を「メストラスによって開発された面ファスナー」、「人々の要求に応える形」を「人々が求める形」、「活躍の場」を「身近な生活場面や宇宙空間」、「さらなる便利さ」を「とても使いやすい」といったキーワードに類する言葉を使って書いている。(解答類型2)		
1	条件①、②のいずれも満たして解答しているもの(キーワードをそのまま書いている)	◎
2	条件①、②のいずれも満たして解答しているもの(キーワードに類する言葉を用いて書いている)	◎
3	条件①、②のいずれか満たして解答しているもの	
9	上記以外の解答	
0	無解答	

表4に基づいた採点の結果を表5に示す。

表5 問題1の結果

解答類型	プレテスト (33人)		ポストテスト (33人)	
	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
1◎	1	3	3	9
2◎	12	36	13	39
3	3	9	4	12
9	12	36	9	27
0	5	15	4	12

要旨が書かれている段落を見付けるとともに、要旨をキーワードや、それに類する言葉を使って書いている児童は、プレテストでは39%であったが、ポストテストでは48%になった。このことから、「初めー中ー終わり」の構成を手掛かりに要旨を捉えることができるようになった児童が増えたと考えられる。

プレテストとポストテストで変容のあった児童 a の記述を表 6 に示す。

表 6 問題 1 における児童 a のプレテストとポストテストの記述

プレテスト	ポストテスト
面ファスナーのかいはつについて	身近な生活場面だけでなく、宇宙空間にまで広がり、さらなる便利さがついぎゅうされているということ

児童 a はプレテストでは、「面ファスナーのかいはつ」という「初めー中ー終わり」の「中」に当たる部分に要旨が書かれていると考えていたが、ポストテストでは、要旨が「終わり」の段落に書かれていることに気付いている。

次に、問題 2 におけるプレテストとポストテストの児童の解答を分析する。筆者の考えを読者に分かりやすく伝えるための論の進め方の工夫について、解答類型を表 7 に示す。

表 7 問題 2 における判断基準

解答類型	正答
(正答の条件) 次の条件を満たして解答している。 ①部分と全体を往還した読みに関する言葉に言及している。 ②全体読みに関する言葉に言及している。 ③部分読みに関する言葉に言及している。	
1 条件①、②、③を全て満たしている。	◎
2 条件②を満たし、条件①、③は満たしていない。	
3 条件③を満たし、条件①、②は満たしていない。	
9 上記以外の解答	
0 無解答	

また、表 8 では、部分の読みのみ、全体の読みのみ、部分と全体の読みの両方について記述している児童の割合を示す。

表 8 部分と全体を往還する読みができた児童の割合 (n=33)

	プレテスト (%)	ポストテスト (%)
部分と全体を往還する読みができた	21	52
部分と全体を往還する読みができなかった	64	36
無解答	15	12

部分と全体を往還する読みができた児童が、プレテストでは21%だったが、ポストテストでは52%に

増加した。プレテストでは、部分の読みのみに着目して筆者の論の進め方について考えていた児童が半数以上いたが、部分と全体を往還する読みを通して、部分の読みにおいても全体を念頭に置いた読みができるようになったことが分かる。

表 9 筆者の論の進め方について考える力が付いた児童の割合 (n=33)

	全体の読み		部分の読み		往還する読み		合計	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
筆者の論の進め方について考えることができた	12%	6%	21%	36%	6%	45%	39%	78%

表 9 において、筆者の論の進め方について考える力が付いた児童は、プレテストでは39%、ポストテストでは78%に増えたことが分かる。

また、部分の読み (表10) と全体の読み (表11) それぞれの児童の記述を示す。

表10 部分の読みに関する児童の記述

視点	児童の記述
5 W1H	その年、場所や国、時代、いつ、時と場所、どこで、だれが
身近な事例	使ったことがあった、身の回りのもの、身近な物
資料	図、文章と図
事例の順序	面ファスナーの広がりを知れる、筆者のかき方
比較	昔と今を見比べられる、対比
接続語	例えること、接続語
当事者意識	読者に伝えたいこと、読者に気づいてもらう、読者も行動
言い換え	言い換え

表11 全体の読みに関する児童の記述 (太字は要旨を捉えることができていると判断した記述である。)

視点	児童の記述
定義付け	定義化、文章の内容が分かる、言葉の説明、言葉の意味
初め・中・終わり	内容の流れ「初め」「中」「終わり」、きっかけ 初めで言ったことを詳しく説明する「中」、まとめる「終わり」 前もって知ってもらう、 終わりに筆者の考えを伝えている
双括型	双括型で文章をまとめている、内容を整理、だいたい最初と最後に筆者の考え 最初に書くだけだと伝わりにくい、最後にも一番伝えたいことを述べ
論理の順序	やくにたつことをかいている、 筆者の伝えたい順番、筆者の考えをより分かりやすく
要旨	筆者の考えを伝える

さらに、部分と全体を往還した読みができたと判断した児童 b～d の記述を図 4 から図 6 に示す。

筆者の考えを伝わりやすくする事例の順序

図4 部分と全体を往還する読みができていると判断した児童bの記述

図4において、児童bは「筆者の考え」と記述している。これは、「考え」が文章全体で一番伝えたいこととして捉えているため、全体の読みとして要旨を捉えた記述と判断できる。また、「事例の順序」の「順序」を、要旨を伝えるための事例の並びとして捉えているため、部分の読みとしての「事例の順序」と記述したと判断できる。つまり、児童bは要旨を念頭に置きつつ、事例の順序という部分を捉えた往還する読みを行ったと言える。

双括型の文章だから「初め」と「終わり」に筆者の考えがあり、「中」の事例が「終わり」の筆者の考えを伝わりやすくしている。

図5 部分と全体を往還する読みができていると判断した児童cの記述

図5において、児童cは「双括型、筆者の考え」と記述している。これは、「双括型」から文章全体の構成が分かり、さらに要旨を捉えている記述と判断できる。また「「中」の事例の順序」と記述している。これは、「初め」の筆者の考えが「中」の事例により、説得力を増しているという筆者の構成の意図に気付いている記述と判断できる。つまり、児童cは、要旨を理解し、文章構成から部分を抜き出して読むという往還する読みを捉えることができていると言える。

それぞれの段落の内容を短くまとめられて「終わり」に筆者の伝えたいことが書かれている。

図6 部分と全体を往還する読みができていると判断した児童dの記述

図6において、児童dは、全体の読みとして「まとめられて」と記述している。これは、複数の事例や情報を結び付けた文が要旨ということに気付いていると判断した。さらに、部分の読みとして「それぞれの段落の内容」と記述している。これは、各段落のキーワードを抜き出してつなぎ合わせた文が要旨であることに気付く、部分と全体を往還する読みができていると判断した。つまり児童dは、要旨を念頭に置き、部分の読みを捉えることで筆者の論の進め方について考えていることが分かる。

さらに、表12、13に問題2におけるプレテストとポストテストでの児童の変容を示す。

表12 児童eの問題2におけるプレテストとポストテストの記述の変容（下線は論者による）

児童	プレテスト	ポストテスト
e	・面ファスナーが使われているものの例をたくさん挙げている。	・事例の順序（筆者の考えをよりわかりやすく伝えるため。）

表12から、児童eはプレテストでは「例をたくさん」と記述し、ポストテストでは、「事例の順序」と記述している。プレテストの「たくさん」という記述から、児童は事例の数のみに着目していることが分かり、ポストテストでは「順序」と記述していることから、用いられている事例が文章全体を構成するために順序があることに着目していることが分かる。さらに児童は、筆者が事例の順序を要旨が伝わりやすくなるように意図的に配置していることに気付いていることが分かる。

この児童は、要旨を念頭に置き事例の順序という部分を捉えた読みを行ったと判断する。

表13 児童fの問題2におけるプレテストとポストテストの記述の変容（下線は論者による）

児童	プレテスト	ポストテスト
f	・内容を理解しやすくするために段落番号をつけている。	・「初め」「中」「終わり」に分けている。（内容の流れなどを理解しやすい。）

表13から児童fは、プレテストでは「段落」と記述し、ポストテストでは、「内容の流れ」と記述している。プレテストの「段落」という記述は、文章を段落で区切ることにのみ着目していることから要旨への繋がりを意識できていないことが分かる。一方ポストテストでは「内容」と記述していることから、要旨を捉えることができていること、また「流れ」という記述から段落相互の繋がりに気付いていることが分かる。

この児童は、文章全体をまとまりとして捉え読みを進めることを通して、要旨の説得力が増していることを捉えていると判断する。

2 部分と全体を往還する読みは、論の進め方について考える力の育成に有効であったか

(1) 全体を見通すことの有効性について

部分と全体を往還する読みは、その過程において自ずと文章全体を見通すことになる。文章全体を見通すことによって、要旨がどこに位置付けられているのかを捉えることができ、さらに、要旨を基に、なぜ筆者が事例や資料を用いているのかということを考えることで、筆者がどのようにして要旨に説得力をもたせようとしているのかについて考えることもできる。これらのことから、部分と全体の往還によって、全体を見通すことは論の進め方について考える力の育成に有効であったと考える。

文章全体を見通し、筆者の論の進め方について考える力が付いた児童gの記述を図7に示す。

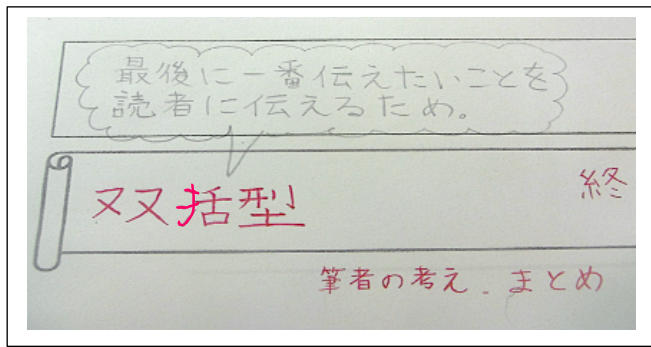


図7 部分と全体を往還させて筆者の論の進め方について考えることができる児童gの記述

児童gは初めと終わりの筆者の考えを比べた際に、終わりで筆者が述べている考えの方がより説得力が高まっていることに気付いたため、「最後に一番伝えたいことを読者に伝えるため。」と記述している。このことから、文章全体を見通して児童は、要旨に立ち戻りながら双括型という文章構成を考えることができていると言える。

(2) 部分の読みと全体の読みをメタ認知する有効性について

多くの児童は振り返りにおいて「部分の読みと全体の読みが何か分かった。「なぜ？」について考えることができるようになった。」と記述している。読みの過程において部分と全体を意識して読み進めていることが分かるとともに、筆者の論の進め方について考えるために部分と全体の読みを行ったことが分かる。

児童が部分の読みと全体の読みをメタ認知することを通して、筆者が説得力を高めるために用いている工夫を捉え、その工夫を部分の読みと全体の読みに分類していた。これは、児童が自分の読みを対象化しメタ認知することができていたためと考えられるため、部分の読みと全体の読みをメタ認知することは有効であったと考える。

(3) 往還する読みに関する改善案について

部分と全体を往還する読みでは、「虎の巻」で捉えた、論の進め方に関わる重要な語句や必要な情報を捉えられていないため、共通点や相違点を観点に、部分と全体に分類できていないというつまづきが見られた。そのため改善案として、重要な語句や必要な情報を捉えられるように、文を区切り重要な語句を抽出させた上で部分と全体に分類させることが考えられる。また筆者の論の進め方について考える学習場面では、要旨を捉えるために読むという、論の進め方について考える目的を意識できていないというつまづきが見られた。そのため改善案では、グループでの話し合い活動を活用し、常に要旨を念頭に置きながら筆者の論の進め方について考えるという目的を共有させる声掛けを繰り返し行うことで、児童は常に要

旨を念頭に置きながら筆者の論の進め方について考えることができると考えられる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

説明的な文章を扱う「読むこと」の学習指導において、部分と全体を往還する読みを行うことは、文章全体を見通し、自分の読みをメタ認知することができ、筆者の論の進め方について考える力を育成することにおいて有効であることが分かった。

2 研究の課題

筆者の論の進め方について考える上で、要旨を把握できていないというつまづきがあるために要旨に立ち戻ることができず、自らの読みをメタ認知できない児童がいた。部分の読みとして事例や資料などと叙述を結び付け、要旨を的確に捉えることができるように声掛けを行う必要がある。

3 成果と課題を踏まえた今後の方向性について

「読むこと」において、筆者の論の進め方について考える力を育成するために、単元の導入時に学習の目的を意識することを児童と共有し、部分と全体の読みを往還する必要性をもたせたり、常に要旨に立ち戻らせることの重要性を意識させる手立てを工夫したりする。

【注】

- (1) 河野庸介(2010)：「国語科授業にスリルとサスペンスを」教育出版p. 21に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成29年)：「小学校学習指導要領解説国語編」東洋館出版社p. 148
- 2) 森田信義(2011)：「『評価読み』による説明的文章の教育」溪水社p. 11
- 3) 森田信義(2011)：前掲載p. 15
- 4) 森田信義(2011)：前掲載p. 19
- 5) 森田信義(2011)：前掲載p. 23
- 6) 森田信義(2011)：前掲載p. 36
- 7) 森田信義(2011)：前掲載p. 38
- 8) 森田信義(2011)：前掲載p. 32
- 9) 河野庸介(2010)：「国語科授業にスリルとサスペンスを」教育出版p. 13
- 10) 河野庸介(2010)：前掲載p. 19
- 11) 古賀洋一(2012)：「説明的文章の読みにおける条件的知識育成に関する一考察」『全国大学国語教育学会国語科教育研究大会研究発表要旨集』122巻p. 71

【参考文献】

- 小学校国語科用教科書(令和6年)「未来につなぐ工芸品(国語四下 かがやき)」光村図書